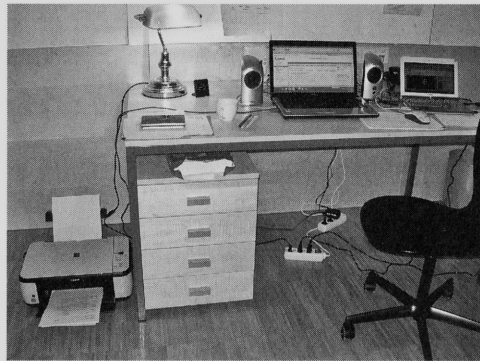




▶キッチン。トースターとコーヒーメーカーは備え付け。上段にレンジ。ガスではなく電磁調理器。

▲洗面所、シャワーとトイレ。

▼ゲストハウスの仕事机。壁はコルクで、メモを画鋏で止めることができる。



あのシェーンブルン宮殿と大庭園に到着するという立地。
二十七平米ほどの室内はコンパクトにできていて、真ん中にあるボックス型の空間に洗面所、シャワーとトイレが収まっている。手前がキッチンで、作り付けの冷蔵庫、電子レンジ、さらに使い勝手のいいコーヒーメーカーも備えている。ボックスの奥にベッドと

ウィーンで部屋を探すのは大仕事だった。筆者は三十歳台に八カ月、四十歳台に二年間ウィーンに住んだことがあるので、いろいろと苦い体験がある。すんなりと理想的な住居が見つかることはまずない。考えてもみて欲しい。外国人とりわけアジア人が、大した紹介者もなしに短期間賃借人になることが、そもそも簡単なわけがない（あなたが大家であるとして、同様のケースに遭遇したらどうしますか？）。それでも

ウィーンのボヘミアン用ワンルーム ——ウィーン大学ゲストハウスの勧め

Hayasaka Naruo
早坂七緒

春は名のみ四月初旬。その部屋は八階、最上階にあった。北側の大きな窓からは、ウィーン十五区の家並みが見わたせる。ごく自然に『ラ・ボエーム』の冒頭場面がシンクロした。

ロドルフォ（少し振り向いて）

灰色の空に

何千もの煙が昇るのを眺めてるのさ

ここはパリではなく、煙突から煙が立ちのぼっているわけでもない。それでも画家マルチエロが紅海の絵を描いているアトリエは、影が移動しない北向き部屋であったにちがいないし、エレベーターのない前世紀には最上階が家賃の安い、ボヘミアン向きの住居で

あったろう。

やや旧聞に属するけれども二〇一〇年度在外研究（超短期）に際してウィーン大学客員研究員として入居したゲストハウスは、絶好の環境にあった。なにしろ正面玄関から五メートルほどのところに57Aと12Aのバス停があって、ほぼ五分間隔でバスが停まる。地下鉄駅は徒歩五分のところにあつて、U6とU4の二路線がほぼ三分間隔で滑りこんでくるのだ。まさに交通至便。その上、通りをはさんだ向いは警察署で常時パトカーが二、三台待機している。数軒となりにはスーパーマーケット。裏口を出ると、カフェ、レストラン、銀行、タバコ屋（切手、乗車券なども扱う）さらに別のスーパー。郵便



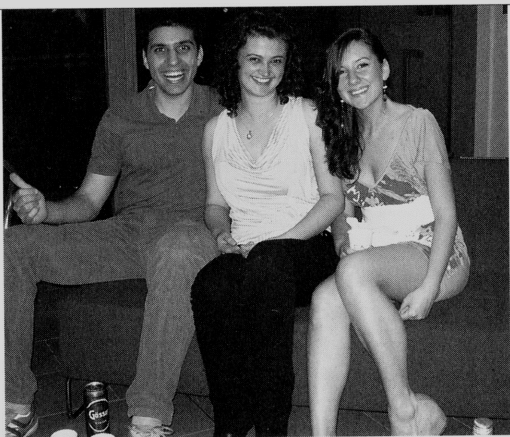
ウィーン大学ゲストハウス787号室から15区を見おろす。

局がないのが不便だが、なに、バスで東に二停留所も行けば、ちゃんとした郵便局がある。西に散歩して三十分で、

戸棚、仕事机がある。よくできている。もちろん電話も、LANケーブル端子もある。光ケーブルでないのでダウンロードにやや時間がかかること、ウォシユレットでないことが難点といえば難点だった。

週に一度、お掃除のおばさんが来る。家賃は月額三九五ユーロ（四万円）四万五千円）で、準都心としては破格の安値。ÖAD（オーストリア学術交流会）のお蔭である。

*



エーレナ（右）の霊名祝日パーティーから。

日本人は清潔だからとか金持ちだからとか、一部の事情通は賃貸を希望するのだが、それは日本人協会を通じてアウンズされるか、あるいは人づてに口コミで紹介される。大家はたいいていウィーン人であっても、そこにほぼ必ず、あやしい日本女性（ないし東洋人女性）が介在するのである。彼女らも音楽学生であり、なかば挫折してウィーン音楽家などの夫人となつていくから、とにかく変則的ながらドイツ語が話せる。で、日本から家捜しに来る音大生ないし大学教師はほとんどドイツ語が話せないで、大家との仲介や諸手続の助言に活躍するわけだ。これが胸先三寸でどうにでもなるからなかにはかなりあくどい口を使う者も出てくる。筆者は二度目のウィーン滞在の際には、M子という仲介人のからんだ住居を、二週間で解約して別の住居に移り住んだ。これも筆者がドイツ語で大家ほかと交渉できたからで、一般の音大生等にはできないことだ。

推進されていて、各国の留学生が隣人イタリア人のカップルは広めの住居に入っていて、よく廊下にテーブルを出してパスタを食べていた。隣室にはブルガリアから来たエーレナという美少女。五月の彼女の霊名祝日には、そのパーティーに招待された。ソファとテーブルのある広めの廊下が即席のパーティー

う（このあたりの事情については膨大な素材があるので、ここではこの辺でやめておくことにしよう）。この二番目の住居の大家であるE夫人とは、ほぼ毎年住居を訪問して手作りのケーキをご馳走になったりホームコンサートを聴かせてもらったりする間柄だし、仲介人のドクトル・F女史とも頻繁に情報交換しているから、これはこれでよかつたと考える。

一つだけ例を挙げると、元同僚の経済学部のS先生がウィーンに在外研究に行つたときのこと。当初一家四人でホテルに滞在しながら住居を探して、一カ月経つても見つからない。ついに奥様がキレて、（滞在費用の）お金は豪遊して使い切つて、子供を連れて日本に帰るから、あとはあなた一人で勝手にやつてちょうだい、と宣言したとか。——結局それなりの住居が見つかつて、一家離散は寸前に阻止されたらしいのだが、ことほど左様にウィーンで住まいを捜すのはむずかしい。筆者

パーティー会場となり、おめかししたブルガリア美女がぞろぞろと現れた。老描がカツオ節工場にぶちこまれた感じ。三十分ほど目の保養をして、「仕事があるから」と失礼した。

実際この年は、幸か不幸か仕事の当たり年で、三重四重に論文、著書、翻訳などの仕事が舞いこんできてベルリン、グラーツ、ブルノ（チェコ）ほか調べる物に出かけたり、ウィーン演劇博物館ほかで資料にあたる用事が山積していた。一週間不在にしようが、夜中に帰宅しようが、何の不都合もなく、神出鬼没のパヘミアンにとっては快適な環境であつたといえる。

*

ぜひ見習いたいものが一つ。洗濯機である。管理人からカードを購入して、二台ある洗濯機が空いていたら使用できるのだが、これが九十度の熱水で洗濯するマシン。欧州ではごく普通の洗濯機なのに、日本には皆無である。ヨーロッパ、アジア、アフリカが地続き

も今回の在外研究にあたり、友人知人を頼つてあれこれ候補を集めたけれども、どうにも最適の住居は見つからなかった。思いあぐねて受入れ教授の博士に助言を求めたところ、ÖADに相談せよ、との返信。あとはトントン拍子に話が決まつた。

*

ÖAD（オーストリア学術交流会）は初耳だった。その昔オーストリア政府奨学生だった筆者にしてそうなのだ。烏許がましくもオーストリア文学会編集委員を務めたこともあつたが、ÖADについて聞くことはなかった。ところがこれは巨大組織で、全国に学生寮ほか居住施設を二千件保有し、客員研究員や交換留学生一万人に住居を提供している。これを知っていたら筆者も、過去二回の心労や無駄な出費が避けられたのに、と臍をかむ思いである。これからオーストリアに留学ないし在外研究に行く方々にはぜひお勧めしたい。ERASMUSという交換留学制度が

の欧州では、さまざまな人種が否応なく接触しており、バスや電車、ホテルで害虫に噛まれたり、何らかの皮膚病に感染するリスクは高い。諸外国からきた多数の入居者が使用する洗濯機だからこそ、消毒・殺菌効果の高い熱水洗濯機でなければならぬ。高名な某MCはかつて中大付属高校陸上部で鳴らしていたのだが、「インキンが厭で」獨協大仏文科に進学してしまった。人材の流出である。運動部に限らず、各種寮、とりわけ交換留学生の寮にはこのような洗濯機を導入すべきであろう。まずはメーカーが（特許その他の障碍をクリアしつつ）努力すべきだ。ウオシユレットよりも急務ではないだろうか。

— 注

(1) ÖAD（オーストリア学術交流会）
<http://www.housingoead.at/>

（理工学部教授 独語・独文学）